

第 1 章

2004年度工学部授業アンケートについて

1 授業アンケートのねらいと特徴

(1) 授業評価をめぐる状況

＜学生による授業評価＞を実施している大学は、2002 年度現在、約 84 %にのぼっている（文科省調査）。

さらに、2004 年度から、国立大学法人化に伴う法人評価と大学教育の質保証をめざす認証評価が実施されるようになったことにより、＜学生による授業評価＞はますます広がりつつある。法人評価や認証評価に向けて、各大学・学部は自己点検・評価報告書を作成しなければならないが、＜学生による授業評価＞はその際の資料となるからだ。工学系では、JABEE（日本技術者教育認定機構）による審査・認定の資料としても、＜学生による授業評価＞が求められる。

しかし、京都大学では、＜学生による授業評価＞は、組織的なかたちではまだあまり行われていない。私が知る限りでは、全学共通科目で 2002 年度・2003 年度に限定つきで実施されたが（2002 年度は任意、2003 年度は A 群科目のみ）、それ以外は、薬学部、法科大学院など一部の部局で行われているにすぎない。工学部では、2000 年・2001 年に「ディベート型シンポジウム」に先だってアンケートが実施されたが⁽¹⁾、それは、ごく一部の授業科目とカリキュラムを対象としたものであった。

私は、現在、多くの大学で組織的に行われている＜学生による授業評価＞が、必ずしも教育改善にとって有効に機能しているとは思わない（補論 1「学生による授業評価——現状と課題——」参照）。しかし、「学生が授業をどうみているか」「学生が授業から（成績に示される以外の）何を学んでいるか」を抜きに教育改善が語れないというのも、また事実だろう。

(2) 今回の授業アンケートのねらいと特徴

今回、私たちは特色 GP に採択された高等教育研究開発推進センターの取組「相互研修型 FD の組織化による教育改善」の活動の一つとして、工学部との連携で「授業アンケート」を実施することにした（本取組の概要については、資料 1-1 参照）。

京大工学部で授業アンケートを実施することに、どんな意味があるのか。京大工学部で実施するからには、どのような授業アンケートでなければならないのか。

私たちは、工学部からの代表メンバーとセンタースタッフとでワーキンググループ（特色 GP・WG）を組織し、数回にわたって議論を行った。

今回のアンケート結果は、自己評価・点検報告書の資料としても使われるだろうが、それ自体が目的ではない。特色 GP の支援を受け、京大でかつてないほどの規模で＜学生に

(1)『京都大学高等教育叢書 12 ディベート形式による工学部 FD シンポジウム—工業科学科・地球工学科・物理工学科—』2001 年参照。

による授業評価>を実施するからには、京大工学部の固有性・独自性を盛り込んだものにした
たいと考えた。

今回の授業アンケートの特徴、およびその意図は、以下の点にある。

① 「授業評価」ではなく「授業アンケート」にする

すで書いてきたように、私たちは、「学生による授業評価」ではなく「授業アンケート」
という呼び方をしている。

「学生による授業評価」という言葉には、教育サービスの消費者としての学生が、商品
である授業を評価するというニュアンスが含まれがちである。また、一部の大学では、<学
生による授業評価>の結果を用いて、教員の教育力の評価・管理を行っている。私たちが、
「授業評価」ではなく「授業アンケート」にしたのは、このような授業評価になるのを避
ける意図があった。

今回の「授業アンケート」は、教員と学生のそれぞれにとって意味をもつべきものであ
る。教員にとっては、自分の授業の特徴や問題点を認識したり、学部のカリキュラムを再
検討したりする手段となる。一方、学生にとっても、その授業科目についての自らの学習
を振り返る機会となる。

ここで注意する必要があるのは、アンケート結果は、あくまでも「評価のための情報」
にすぎないという点である。アンケートには 30 個の評定項目が含まれているが、これら
のうちのできるだけ多くの項目ができるだけ高得点であることがよい授業の証、というわ
けではない。たとえば、「授業はノートを取りやすかった」という項目がある。板書をノー
トテーキングするタイプの授業形態をとっていない場合、この項目の評定値は低くなる可
能性が高いが、それが即、授業の問題点を意味するわけではない。得られた情報にもとづ
く評価は、個々の教員（および教員団）が自分自身の授業の目的にてらして行うべきもの
なのである。

② 記名式にする

今回のアンケートは記名式である。記名式には、いくつかのメリットがある反面、成績
に影響することをおそれて率直に書けなくなるという懸念もある。今回のアンケートでは、
「回答用紙を授業クラスごとの回収封筒に直接入れ、最後に提出した学生が封をし、それ
を授業担当教員が事務に提出する」「教員には学生の特定につながる情報を除いた結果をフ
ィードバックする」という手続きをとることで、その懸念が最小限になるようにした。

一方、記名式によるメリットはきわめて大きい。回答に責任をもたせるということはも
ちろんだが、なんといっても大きいのは、(a) 授業アンケートの回答内容と成績がどう相
関しているか、(b) ある学生の回答内容が、授業科目間でどのように異なっているか、(c)
ある学生の回答内容が 1 回生から 4 回生までの間にどう変化するか、などをみることがで
きる点だ。これによって、教育の質を、いわゆる“満足度”と達成度の両面から把握する
ことができるとともに、4 年間のカリキュラムの有効性を学生の知的成長と関連付けて検
討することができるようになる。

③ キーワードを書かせる

今回のアンケートでは、4 段階で答える評定項目と自由記述の他に、「この授業を通して、

重要であると思った概念・理論・キーワード等を5つあげて下さい」という質問も設けている(各キーワードについての理解度も4段階で自己評価させる)。評定項目と自由記述は、どの大学の授業評価にも含まれているが、キーワードを書かせるものは管見の限りでは見あたらない⁽²⁾。

キーワードを書かせることには3つのねらいがある。第一には、学生に学習の振り返りを促すこと、第二には、このアンケートの内部でも“満足度”と達成度の関係をみられるようにすること、そして第三に、アンケートのやりっ放しを防ぎ、結果の分析・評価の仕事に教員を巻き込むようにすること、である。最後の点については、各教員の考えるキーワードをあげてもらい、それと学生のあげたキーワードの一致度をみたり、各教員に学生のあげたキーワードについてのコメントをもらい、それを報告書に掲載するといったことを考えている。

(3) 京大工学部の固有性・独自性との関連

現在、工学教育の分野では、8大学(旧七帝大+東京工業大)を中心に、「創成型科目」と「アウトカムズ評価」を中核とする教育改善が進められている。

このうち、「創成型科目」については、専門分野の学習への動機づけ、コミュニケーション能力・プレゼンテーション能力やチームとしての作業能力の育成などを目的として、低学年段階から実施する大学・学部が多い。これに対して、京大工学部では、伸びのある思考力や陳腐化しない応用力を身につけるには、むしろ、低学年段階では基礎科目を重視し、演習や卒業研究で創成型教育に取り組む方がよいと考えており、その方針にそってカリキュラム編成がなされている(京都大学工学部新工学教育プログラム実施検討委員会「京都大学における新工学教育プログラムの検討状況(8大学委員会の検討項目への対応)」2000年5月30日)。

今回の授業アンケートは、全学年を対象としていること、また、記名式によって追跡調査が可能になったことで、授業評価だけでなくカリキュラム評価の意味あいをも強くもつものになっている。また、私たちは、同じく特色GPの活動として卒業研究調査も並行して進めている。両者を組み合わせることで、「京大型の創成型教育」が果たして所期の目的を達しているのかどうかの検証が可能になるだろう。

一方、「アウトカムズ評価」に関していえば、今回の授業アンケートは、いわゆる“満足度”をみるだけでなく、達成度とも相関させて分析することができるよう設計されている。また、卒業研究調査の方は、4年生・修士2年生・30歳時の3地点で行う予定にもなっている。両者を組み合わせれば、学生一人ひとりのアウトカムズをより多角的かつ長期的に把握することが可能である。教育は単線的・短期的な因果関係で説明されるべきものではないことを考えれば、このことはぜひとも必要だろう。

<学生による授業評価>は、顧客満足度調査であってはならない。それはどの大学の<学

(2)多くの大学の<学生による授業評価>を比較検討した資料として、河合塾「学生による授業評価」事例研究会の報告書(2003年7月、未公刊)が参考になった。

生による授業評価>についてもいえることだが、とりわけ「自学自習」「対話」を理念とする京大の授業評価、そして、第一線級の研究者・エンジニアの育成をめざす京大工学部の授業評価であれば、なおさらであろう。“満足度”と達成度（学生の知的成長にどれだけ寄与したか）の両面があって、初めて授業やカリキュラムが可能になるのである。

授業評価は、教員と学生が、ともに「学問教育共同体」の一員として、よりよい教育を作り出していくためのツールとして機能するべきである。今回の授業アンケートのねらいもそこにある。

2 授業アンケートの内容と方法

(1) アンケートの対象

2004 年度後期に実施された授業アンケートの対象は以下のとおりである。

- ・ 学科：工学部 6 学科のうち、建築学科、地球工学科、電気電子工学科の 3 学科とする。
- ・ 授業形式：「講義」のみとする。「実験・実習」「演習」は含まない。
アンケート項目は授業形式によって変える必要がある。今回は、対象を「講義」のみとしたので、「講義」用のアンケート項目を作成した。ただし、2005 年度以降は、他の授業形式も対象とする予定である。
- ・ 学年：1～4 年生。ただし、全学共通科目については、各学科の専門基礎科目のみとする。

(2) アンケート用紙の構成

アンケート用紙については、巻末の資料 2-3 を参照していただきたい。

まず、冒頭の囲みの中で、このアンケートの目的を述べた。特に、今回のアンケートは記名式なので、学生が成績への影響などを気にせず率直に回答できるよう、アンケート用紙の取り扱いや個人情報保護については詳しく説明した。

アンケート項目は、大きく以下の 4 つの部分からなる。

(a) フェイスシート

① 学生についての情報

- ・ 氏名、学生番号、年齢、性別

学科と学年は、学生番号によって識別できるようになっている。

- ・ 出席率

京大の「自学自習」の伝統から、かつては「授業には出ずに自分で勉強する学生」が多かったが、最近は出席率が格段によくなったといわれている。しかし、一方で、「出席率が高い学生がよく理解しているとは限らない」という声もよく耳にする。こうしたことから、出席率とアンケート項目の回答内容や成績との関連をみるために、出席率を入れた。大学によっては、一定の出席率を満たさないものは分析の対象に含めないというところもあるが、今回は、そのような方針はとっていない。

② 授業等についての情報

- ・ 科目名

記入ミスや記入漏れを防ぐため、科目名、および工学部指定の科目コードをあらかじめ印刷した上で配布した（科目コードは、用紙の表の末尾に、マークシート

で印刷)。

なお、科目コードから、学科、曜日、授業担当教員、非常勤・常勤、必修・選択などの情報が得られる。

・実施日

(b) 評価項目

評価は4段階とした。これは以下のような理由による。

- ・一般に、5段階にして3を「どちらともいえない」とすると、判断を避けて3に偏る傾向があること。
- ・4段階であれば、「あてはまる」「ややあてはまる」を肯定的回答、「あまりあてはまらない」「あてはまらない」を否定的回答とグルーピングしやすいこと。
- ・かつて、今回の授業アンケート作成メンバーの一人である大塚が、同一の質問項目について4段階評価と5段階評価の2種類を実施した経験によれば、両者の結果にはそれほど大きな差異がないと判断されること⁽¹⁾。

評価項目の設定にあたっては、以下の点に留意した。

- ・教員側、学生側、その相互作用、科目内容などに関する項目をバランスさせる。
- ・授業の目標とすべき「従属変数」に関わる項目を含める。
(たとえば、「(30) 総合的にみて、自分にとって意味のある授業だった」がそれにあたる。なお、従属変数に関わる項目は、「総合的にみて、この授業に満足している」「この授業を総合的に評価してください」といったかたちで表現されることが多いが、＜学生による授業評価＞が顧客満足度調査にならないようにするために、また、回答結果はあくまで教員が授業評価をするための情報であるという認識に立って、「満足」や「総合的に評価」といった表現は避けた。)
- ・「従属変数」に影響を及ぼすと思われる要因に関わる項目を含める。

評価項目は、大きく以下の3つに分類される。

- ①自分自身の学習状況等について（7項目）
- ②授業の内容・方法等について（15項目）
- ③授業全体を通して得られた成果等について（8項目）

前節で述べたように、この授業アンケートは、教員にとっての授業評価、学生にとっての学習評価を意図しているので、一般的なく学生による授業評価>と比べて、①が多くなっている。また、アウトカムズ評価の情報を得ることも意図しているので、③が多くなっ

(1) 数十の科目を対象に、同一の質問項目について4段階評価と5段階評価を実施し、その科目ごとの平均値の相関係数を求めたところ、0.9台の後半という非常に高い値を示し、いずれの段階数でも科目の平均値の相対位置に関してはほぼ同値とみなすことができた。

ている。

(c) キーワード等

すでに述べたように、このキーワード欄の設定が、今回の授業アンケートの特徴の一つである。個々のキーワードには理解度も4段階で記入するようになっている。

通常の〈学生による授業評価〉では、理解度は評定項目の中で尋ねられるだけである。もちろん、成績評価はあるが、授業評価が無記名で行われるので、理解度についての回答と成績とを照合させることはできない。

これに対し、今回の授業アンケートでは、理解度に関する評定項目（「(8)授業は理解できた」「(10)どこが重要なポイントであるかがよくわかった」）の他に、このキーワードについての質問があり、さらに成績とも照合させることができる。たとえば、アンケートで「授業は理解できた」と答えているのに、適切な「キーワード」をあげることができなかったり、成績がよくなかったりした場合、その原因として、学生の側に自分の理解度を把握するメタ認知が欠けている、理解度についての要求水準が低い、レポートや試験が難しすぎる、といったいくつかの解釈が可能である。どの解釈がより妥当であるかは吟味が必要だが、いずれにしても、〈学生による授業評価〉だけを頼りにして授業評価をおこなうよりははるかに授業の見かたが広がるだろう。

(d) 自由記述項目

自由記述項目ではあるが、「自由に」という言葉を使うと記入しない学生が多く出る可能性があるので、あえてこの言葉は入れず、①～⑤までの内容の例示を行った。

(3) 実施時期・方法

実施時期・方法については、巻末の資料2-4『授業アンケート』実施に関する留意点を参照していただきたい。これは、授業アンケートを実施する教員あて、アンケート用紙とともに送付したものである。なお、「[5] 授業アンケート結果のフィードバック」に書かれている「授業アンケート速報版の報告書」が今回のこの報告書である。

実施時期・方法はここに詳しく書かれているので、付け加えることはほとんどない。ただ、実施時期については、1/11～26の期間では、集中講義やすでに授業が終了している科目などがあり、当初予定した科目すべてで授業アンケートを実施することはできなかった。実施時期の選定は、今後に向けての検討課題である。

3 計画・実施の組織と経過

(1) 組織

今回の授業アンケートの計画・実施は、工学部とセンターの連携のもとで行われた。工学部教員・職員とセンター教員からなる「特色 GP・WG（ワーキンググループ）」が編成され、すべて議論の上決定された。WG のメンバーは次のとおり。

工学部

荒木 光彦（工学部長）
土屋 和雄（工学部教育制度委員会委員長）
湯浅 太一（新工学教育プログラム実施検討委員会委員長：情報学科）
前田 忠直（新工学教育プログラム実施検討委員会委員：建築学科）
細田 尚（同上：地球工学科）
大澤 靖治（同上：電気電子工学科）
北條 正樹（同上：物理工学科）
吉田 潤一（同上：工業化学科）
川崎 昌博（工学部自己点検・評価委員会委員長）
河合 潤（同 副委員長）
沖田 義孝（工学部教務掛長）

高等教育研究開発推進センター

田中 每実（統括）
大塚 雄作（授業アンケート担当）
松下 佳代（同上）
神藤 孝昭（卒業研究調査）
酒井 博之（同上）

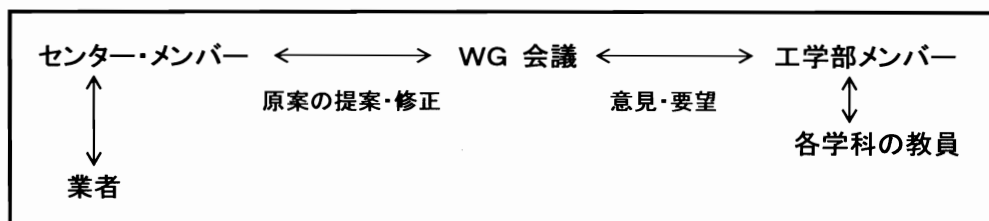
具体的には、授業アンケートの目的・内容・方法についての原案をセンター側で作成し（資料 2-1 参照）、それを WG の議論にかけ、必要があれば、工学部の WG メンバーが各学科の教員に意見を求め、それを再び、WG の会議にフィードバックするという手順をたどった。

(2) 業者への委託

今回の授業アンケートにおいては、一定部分を業者に委託した。これについては、巻末の資料 2-5 を参照していただきたい。

業者に業務を委託するにあたっては、個人情報保護の問題が出てくる。今回の業者は 2004 年 11 月にプライバシーマークの取得申請を完了させており、Web サイト

(<http://www.dataentry.co.jp/security-and-privacy/index.html>) にも「個人情報保護方針」が掲載されていたが、WG 会議で、工学部側から、より厳密な個人情報保護を求める意見が出されたため、その内容を盛り込んだ覚書をかかわすことになった。これについては、巻末の資料 2-6 を参照していただきたい。



(3) 経過

授業アンケートの計画から実施にいたる大まかな経過は以下のとおりであった。

2004 年

- 10 月 12 日 荒木工学研究科長との打ち合わせ
- 11 月 15 日 特色 GP・WG 第 1 回会議
- 11 月 29 日 特色 GP・WG 第 2 回会議
- 12 月 3 日 業者との打ち合わせ
- 12 月 6 日 特色 GP・WG 第 3 回会議
- 12 月 10 日 授業アンケート依頼状を授業担当教員あて送付（資料 2-2 参照）
- 12 月 21 日 授業科目一覧の確定

2005 年

- 1 月第 1 週 授業アンケート用紙を授業担当教員あて送付
- 1 月 11 日～26 日 授業アンケート実施
- 3 月 15 日 業者からセンターへアンケートデータの返却
- 3 月 23 日 第 11 回大学教育研究フォーラム・ラウンドテーブルにおいて中間報告
- 3 月 28 日 各教員へのアンケート結果のフィードバック
- 3 月 31 日 『2004 年度工学部授業アンケート（速報版）』の刊行